

西の湖に放流されたニゴロブナの産卵期における 接岸状況の経年変化

片岡佳孝・井出充彦・孝橋賢一・亀甲武志・中新井隆

1. 目的

現在、ニゴロブナの種苗放流は水田育成種苗の比率が高くなっている。

水産試験場では、2012年と2013年にそれぞれ近江八幡市常楽寺の水田で育成され西の湖に流入する農業用水路に放流されたニゴロブナ（以下常楽寺放流魚）を対象として放流後の分散および、それらの再生産への関与について調査を行ってきた。その結果、常楽寺放流魚は、放流場所の水路（常楽寺）および近接した水路（浅小井）において集中して採集されることが分かってきた。

本年度についてもニゴロブナの産卵期に常楽寺水路と浅小井水路において採集調査を行ってデータの蓄積を図った。

2. 方法

2016年4月に常楽寺（放流場所）と浅小井の農業用水路でニゴロブナを採集し、2012年と2013年に常楽寺で放流されたニゴロブナの混獲率を調査した。放流魚の確認はALC標識の有無とウロコによる年齢査定により行った。なお、推定放流尾数は2012年度が672,000尾、2013年は535,000尾であり、全放流魚の耳石にALC標識が装着された。

3. 結果

常楽寺水路では、71尾のニゴロブナが採集され、46尾が常楽寺の放流魚であった。46尾のうち14尾が2012年放流魚、32尾が2013年放流魚であった。浅小井では、58個体のニゴロブナが採集され28尾が常楽寺放流魚であった。28尾のうち2尾が2012年放流魚、26尾が2013年放流魚であった。

本年度も採集尾数は減少したものの放流場所付近での常楽寺放流魚の採捕は続いた。

2013年から行ってきた常楽寺水路における採集調査結果から全長15cm以下の個体は1歳魚と考えられる。再生産があれば、少数ながら1歳魚が採捕されるはずであるが、それらは例年ほとんど採集されない(図1)。このことは、常楽寺水路では再生産ができていないことを示している。

ニゴロブナ資源の維持と増大のためには、天然再生産が必要である。天然再生産が行われるような環境整備や助長技術が必要である。

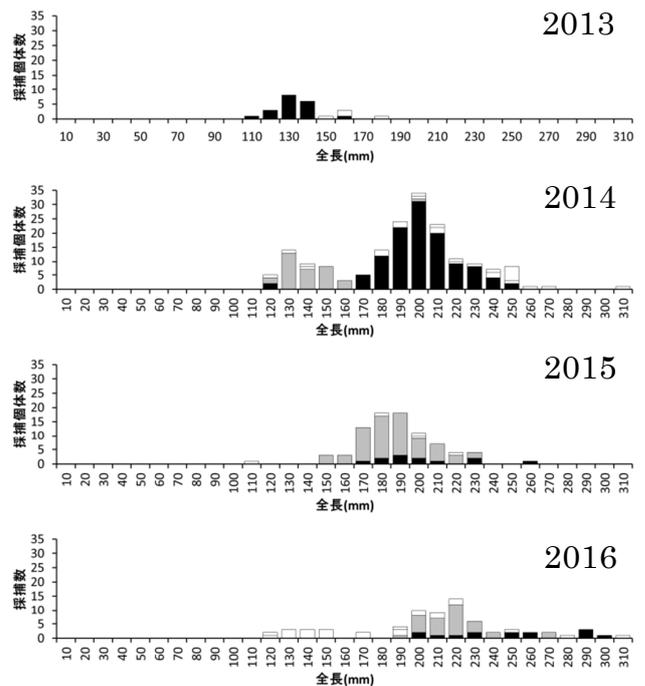


図1 常楽寺水路で採集されたニゴロブナの体長組成（■2012年常楽寺放流魚、■2013年常楽寺放流魚、□その他）